３月１５日（火）　毎日新聞

失われた緑の森再生へ

島原で植樹 高校卒業生ら70人参加

雲仙・普賢岳の噴火災害で緑が失われた古里に森を再生させる恒例の植樹活動が13日、島原市千本木地区の砂防えん堤内であり、地元の高校の卒業生ら約70人が参加した。

千本木地区は噴火災害で全住民が立ち退きを強いられ、火砕流被害で家屋と共に緑が焼失した。植樹は1999年、造園業者らでつくる市民団体「雲仙百年の森づくりの会」（宮本秀利会長）が島原半島内の高校に参加を呼びかけ、「卒業記念植樹」として始まった。

毎年、就職活動や受験を済ませた３年生が1000人規模で参加し、これまでに約４㌶に３万本超の樹木を再生させた。だが、コロナ禍の影響で昨年から規模を縮小している。

13日は、ヤマボウシやクヌギの苗木350本を植えた。島原農高を卒業した井上愛加里（あかり）さん(18)は「歴代の先輩たちが植樹してきたので、引き継ぎたかった。古里に貢献できてうれしい」と話した。宮本会長は「大きく育った木もあり、後世に災害を語り継ぐ存在として守っていきたい」と話した。

【近藤聡司】

火砕流で焼失した森を再生させるため、苗木を植える卒業生ら